

FEの衰退・消滅

伊藤 健市

1942年5月10日、インターナショナル・ハーヴェスター社 (International Harvester Company, 以下ハーヴェスター社) の社長ファウラー・マコーミック (Fowler McCormick) とその取締役会は、農機具労働者組織委員会 (Farm Equipment Workers Organizing Committee, FEWOC) ——1942年9月、FEWOCは合同農機具・金属労働組合 (United Farm Equipment and Metal Workers of America, FE) となる——との契約書に署名した。それは、1919年3月に導入された非組合型の従業員代表制 (Non-Union Employee Representation Plan) である労使協議会制度 (Industrial Council Plan) に終焉をもたらした。

だがそれは、ハーヴェスター社のFEWOCに対する敵視の新たな幕開けを意味した。同社とFEWOCとの敵対的な関係は第2次世界大戦後も継続する。この敵対的な関係に幕を引いたのは、皮肉なことに組合運動の側での分裂・対決、しかも産業別労働組合会議 (Congress of Industrial Organizations, CIO) 系組合であったFEと全米自動車労組 (United Automobile Workers of America, UAW) との分裂・対決であった。この分裂・対決をうまく利用して、ハーヴェスター社はその最大の敵FEを同社から追放するのである。FEとUAWの分裂・対決は、同社が直接画策したものではなかったし、UAWの路線の変更という点も見逃すことはできない。だが、結果的に、FEの衰退・消滅という同社にとって有利な状況に至ったことからみれば、そうした方向に誘導したのは同社であったとみるべきであるし、実際、ハーヴェスター社がFEに比してUAWに肩入れするような行動をとっていたことも事実である。

本論文の目的は、FEの衰退・消滅にハーヴェスター社がどうかかわったのかを明らかにすることにある。この点は、労使協議会制度終焉後に、同社がいかなる労使関係を構築しようとしたのかを明確にする際に必要な論点であると同時に、そのプロセスにも労使協議会制度を中核とした1920年代から30年代前半における同社労使関係の残照が色濃く影を落していたことを示すものでもある。

1 第2次世界大戦後の組合運動の展開

第2次世界大戦が終わるまでに、ハーヴェスター社の従業員は、投票によって外部組合を選ぶことで、ウィスコンシン製鋼所を除くほぼすべての主要工場では工場協議会の延長線上に組織

された独立組合 (independent union) を追い出していた。1945年までに、FEは11工場でおおよそ3万人の従業員——約6万9,000人のハーヴェスター社の全従業員の半分に近い数字であった——の代表を務めていた。一方UAWは、組合員数では2位に着け、6つの工場で1万7,000人を代表していると主張していた。さらに、アメリカ労働総同盟 (American Federation of Labor, AFL) に直属する連合組合 (federal union) はミルウォーキー工場を獲得し、その職種別組合は多数の工場において熟練労働者と保守労働者を代表していた。

1942年4月の全国戦時労働局 (National War Labor Board, NWLB) の裁定後、ハーヴェスター社とFEとの間には「蜜月時代」¹⁾ とでも評価される時期があった。それは、戦時生産に対して両者間でみられた共通の関心と、何よりも政府の委員会が賃金に関する紛争を解決していたことがもたらしたものであった。この蜜月時代に終止符を打ったのは、1945年10月初旬のハーヴェスター社の賃上げ提案であった。同社は、戦後起こるであろう労働紛争の機先を制する目的で、同年10月1日に遡って全従業員を対象に付帯条件なく10%の賃上げを提案したのである。このやり方は同社の常套手段であった。例えば、1942年のマコーミック工場での全国労働関係局 (National Labor Relations Board, NLRB) の決選選挙の際には、選挙予定日であった7月30日の1週間前の7月23日に全従業員5万5,000人を対象に5セントの賃上げを行っていた²⁾。

この賃上げ提案に対し、UAWとAFLは受け入れ、FEは拒絶した。ハーヴェスター社の提案は労働紛争を避ける意図のもとに行われたが、FEからすれば——それは組合運動であれば当然のことなのであるが——、契約交渉前のこうした断片的な契約は組合の弱体化に繋がることを懸念した当然の拒絶であった。FEにとって、一括条項 (package) が交渉できる態勢が整うまでそうした断片的な契約に調印することは避けねばならないことだったのである。一方、ハーヴェスター社の意図は、その後行われた戦後最初の契約交渉で明らかになった。同社は、NWLBが1942年に認めた組合員維持条項の更新を拒否したのである。さらに、苦情処理にかかわるショップ・スチュワードに対する賃金支払いを半分に減額し、仲裁に対するそれまでの敵意を踏襲しつつ、NWLBの仲裁条項のさらなる限定化を主張したのであった³⁾。

大戦後のFEを指導したのはジェラルド・フィールド (Gerald Fielde) であった。戦後、商船部隊 (Marchant Marine) から戻った彼は、ハーヴェスター社におけるFEの橋頭堡をさらに強固にする活動に取り組んだ。当時、同社従業員の彼に対する信頼は絶大で、フィールドの

1) Robert Ozanne, *A Century of Labor-Management Relations at McCormick and International Harvester*, University of Wisconsin Press, 1967, p.209. 伊藤健市訳『アメリカ労使関係の一系譜—マコーミック社とインターナショナル・ハーヴェスター社—』関西大学出版部, 2002年, 291ページ。

2) 伊藤健市「マコーミック工場における組合運動の勝利」『関西大学商学論集』第52巻第5号 (2007年12月) を参照のこと。

3) R. Ozanne, *op.cit.*, p.210. 前掲邦訳書, 291~292ページ。

同僚の1人でFEの元専従スタッフであったアル・ヴェリ（Al Verri）は、この点を次のように表現している。

ジェリーと同じ場所にいると、みんなリーダーとともにいることを知っていた。彼は分析力に富んだ素晴らしい知性の持ち主で、事態の推移を説明する際に大いに苦勞することもあったが、座を盛り上げることができたのさ。それが一般組合員の間であれほど人気があった理由さ。みんな、「ジェリー・フィールドのいうことを聞くまで待て」、といていたさ⁴⁾。

フィールドは、ミルウォーキーの弁護士フィリップ・マーシャル（Philip Marshall）に率いられた臨時の政府実情調査団の前で行われた戦後最初の契約交渉で、組合権保障に関する意見を次のように表明していた。

どういった恐れを組合は掴んでいたのか。もしハーヴェスター社が十分に検討した上でNWLBから命じられた組合員維持条項を取り下げれば、その4年間の試行期間と同社での背景を知っておれば、我々はただ1つの結論に至る。それは、この厄介なもの、つまり組合を取り除くために、アメリカで生じるであろう情勢を経済的に利用する目的のためだけに有力者のもとに置かれたいくつもの壮大な計画がある、という結論である。

……（中略）……

ハーヴェスター社は、反組合的な活動に従事したとしてこれまでも言及されてきた。同社は、公式の記録では脅迫と威圧といった行為を行っていたとされ、したがって我々のユニオン・ショップ要求——それには確かに十分な根拠がある——は、我々がもつ恐れに基づいている⁵⁾。

ハーヴェスター社の労使関係部長補佐ウィリアム・J・レイリー（William J. Reilly）によると、1942年以降の組合員維持条項のもとで、同社は組合費を払っていなかったことを理由に200人の従業員を解雇しなければならなかったし、FEは別の理由で20名の従業員の解雇を要求していた⁶⁾。こうした会社側にとって不利な事態は、NWLBが1942年に実施した無記名投票で組合員維持条項に賛成票を投じた94.5%の有権者の存在のもとで生じていた。

1946年1月21日、フィールドは3万人のFE組合員にストライキを命じた。その約1か月後の2月18日、マーシャル調査団は以下の勧告を公表し、事態の収拾に乗り出した。①NWLBの組合員維持条項の継続、②組合費の天引き、③1時間当たり18セントの賃上げ、④苦情処理手続きの最終段階での広範で大まかではあるが拘束的な調停、である⁷⁾。FEはこの勧告を受

4) B. Marsh, *A Corporate Tragedy: The Agony of International Harvester Company*, Doubleday, 1985, p.82.

5) R. Ozanne, *op.cit.*, pp.210-211. 前掲邦訳書, 292~293ページ。

6) *Ibid.*, p.211. 同上邦訳書, 293ページ。

7) *Ibid.*, p.211. 同上邦訳書, 294ページ。

け入れることを票決し、ハーヴェスター社はそれまでと同じ論拠で受け入れを拒否した。この時期、ハーヴェスター社だけではなく、他の2大農機具メーカーであったアリス・チャルマース社 (Allis-Chalmers Company) と J・I・ケイス社 (J. I. Case Company) でも戦時組合権保障を巡ってストライキ——ハーヴェスター社ではFEが、他の2社ではUAWが主導していた——が行われていた。ハーヴェスター社も含む3大メーカーの同時閉鎖は経営側の交渉力を強めた。それというのも、3大メーカー以外の小規模メーカーが市場を奪う心配がなかったからである。最終的に事を決したのは、組合運動に友好的な政府の存在であった。ストライキが2か月目に突入した時点で農機具不足が深刻化し、それに端を発した食糧不足という事態に対処すべく政府がストライキに介入したのである。

政府は、工場の没収と政府による運営という内容で脅迫した。3月初旬、農務長官クリントン・アンダースン (Clinton Anderson) は、労働長官 L・B・シュウェレンバック (Schwellenbach) に対し、「ストライキが続くままにされている毎日は、我々を国家的危機のそば近くに連れて行く」⁸⁾ と警告を発していた。この内容は、シュウェレンバックが大統領に対し、農機具工場を没収する行政命令を出すよう求めるのに十分な根拠を与えた。農機具工場を没収する行政命令は実際に起草されていたし、大統領顧問団の首脳であったヘンリー・モーゲンソー・ジュニア (Henry Morgenthau, Jr.) もストライキ中の工場を政府が没収するよう求めていたのである⁹⁾。アンダースンとシュウェレンバックは、3大メーカーの経営首脳、ハーヴェスター社のファウラー、チャルマース社のウォルター・ガイスト (Walter Geist)、ケイス社のレオン・R・クラウセン (Leon R. Clausen) を召喚する電報を連名で打った。3社は嫌々ながら会合への出席を受け入れたものの、ハーヴェスター社とチャルマース社は本人ではなく部下が出席し、ケイス社は部下すら派遣しなかった。

この会合ではさしたる成果はなかったが、その後ハーヴェスター社とFEは和解協約に至る。両者は、「深刻な農機具不足に終止符を打ち、政府の没収論議に先手を打った」¹⁰⁾ のである。4月9日の和解で、ハーヴェスター社は組合権保障問題で勝利し、組合員維持条項を任意の組合費天引きに置き換えた。FEはショップ・スチュワードの苦情処理手当の継続を勝ち取ったし、賃金パッケージは会社側の17セントに対し18セントの賃上げで解決した。仲裁条項はハーヴェスター社の見解に沿って制限的なものとなったが、拘束的調停の内容では同社がかなり譲歩したものとなった¹¹⁾。FEは戦後初の全社規模での賃金交渉で勝利し、FEの組合員は4月18日に仕事に戻った。この勝利でFEはハーヴェスター社での覇権を握ったかのようにみえたが、事態はそう甘くはなかった。FEの覇権は短期的なものであった。

8) *New York Times*, March 30, 1946.

9) *Ibid.*, March 31, 1946.

10) 11) R. Ozanne, *op.cit.*, p.213. 前掲邦訳書, 296ページ。

ハーヴェスター社でのFEの覇権を揺るがしたのは表面的にはUAWの存在であったが、実質的には戦後最初の交渉における同社の組合権保障問題での勝利、つまり組合員維持条項の撤回であった。FEがハーヴェスター社で勢力を徐々に失い、最終的にはUAWとの抗争で敗北し、消滅する遠因は、この戦後最初の交渉で組合員維持条項を奪われたことにあったのである。

1947年、当時のハーヴェスター社社長ジョン・マカフレイ（John McCaffrey）は、FE組合員に宛てた手紙で、「当社は理性的行動のできる組合との間で良好なる関係を構築したい」¹²⁾と強調した。マカフレイは、FEとの間では良好なる関係の構築は不可能であると次のように語った。

FEと交渉することは、その幹部役員の多くが理性的行動のできない急進論者からなる国際組合とわが社が交渉することを意味する。さらに、彼ら幹部役員は契約を尊重しないし、労使間の平和な関係の構築ではなく労使の分裂状態により大きな関心をもっている¹³⁾。

マカフレイは続けて、ハーヴェスター社は他の22の組合と交渉すると続け、それら組合はすべて「当社と協力し合っている。足並みを乱しているのは、当社でもなく、他の22の国際組合でもなく、それはFEであるように思える」¹⁴⁾とFEを糾弾していたのである。

ハーヴェスター社の経営陣を不快にしたのは、FEの規模ではなく¹⁵⁾、その考え方であった。第2次世界大戦後、CIO系組合は長期で、しばしば暴力を伴う労働争議によって承認を勝ち取っていたが、その後、敵対していた企業との協調的な関係を模索し始める。そうした組合指導者は「労働政治家（labor statesmen）」と呼ばれたように、企業の繁栄を前提に経営側と協議するならば、組合は安泰であるし、ひいては組合員のために多くを獲得できると信じていた。こうした考え方は企業から歓迎されるものでもあった。それに対し、FEの指導層は次のような「事実」を忘れるべきではないと警告している。

ビジネスにはビジネスの立場しかないという事実、そしてビジネスはできるだけ多くを得ようとする原理で動いているという事実、すなわち1年365日、経済的・政治的力を日々適用することによってのみ、ビジネスに搾取を思い留まらせることができるという事実である¹⁶⁾。

12) 13) Toni Gilpin, "Labor's Last Stand," *Chicago History*, Spring 1989, p.46.

14) *Ibid.*, p.47.

15) FEは巨大組合ではなかった。その組合員のほとんどは中西部の労働者であり、1946年に92のローカルで約6万人を代表していた（Steven Rosswurm and Toni Gilpin, "The FBI and the Farm Equipment Workers: FBI Surveillance Records as a Source for CIO Union History," *Labor History*, Vol.27, No.4, Fall 1986, p.485.），その内の約3万4,000人がハーヴェスター社の14工場で働いており、残りは他の農機具メーカーに属していた（T. Gilpin, *op.cit.*, p.47.）。

16) T. Gilpin, *op.cit.*, p.47.

それでFEは、ストライキをする労働者の権利の制限と増大した生産性に結び付けられた昇給を含めて、労働政治家としてしか手腕を発揮できないように規定する団体交渉条件を拒絶した。ヴィクター・G・デヴィナッツ (Victor G. Devinatz) がいうように、FEは「制度化された団体交渉に基づいてユニオニズムを構築するのとは対照的に、正規の団体交渉構造に頼らない作業現場ユニオニズムを構築」¹⁷⁾したのである。つまり、労働政治家的な手段に訴える他の組合指導層とは一線を画する立場をとったのである。

FEの指導層は、ハーヴェスター社経営陣の支持する団体交渉条件が同社の従業員を犠牲にして同社により大きな利潤を保証することになると主張した。例えば、FEの指摘によれば、生産性は労働者のペースを速める (スピード・アップ) か、あるいは省力型の技術と置き換えることによって高めることができる。FEは、次のように述べることで、ハーヴェスター社に容易にこのような目的の達成を許さないと警告した。

労働者が貧乏くじを引くこのようなスピードアップを防ぐことが我々の責務である。労働者は多くの利潤を生めば生むほど、手にするもの少なくなっていく。一方、ハーヴェスター社はますます大きな利潤を手にする¹⁸⁾。

また、多くの組合は協約の有効期間中はストライキを禁止する契約条項に署名していたのに対し、FEは通常、ストライキを行っている組合員に仕事に戻るよう指示するのを拒否していた。ハーヴェスター社はこの点を捉えて、FEが山猫ストを奨励していると非難していた。事実、FEの組合員は事実の相違を解決する目的で簡単に職場放棄していたようである。だがこれは、「作業現場ユニオニズム」を標榜するFEにあっては当然のことであった。一般組合員の好戦性を押さえつけようとしないうFEに対し、同社が次のように苛立ちを隠さないのもこれまた当然のことであった。

もし当社が組合との関係を通して通常の、そして中断のない生産に対する保証を得られないなら、当社は団体交渉から何が得られるのか¹⁹⁾。

これに対し、団体交渉の制度化に反対するFEは、その機関紙『FEニュース (FE News)』の論説で、その立場を次のように明確にしている。

17) Victor G. Devinatz, "An Alternative Strategy: Lessons from the UAW Local 6 and the FE, 1946-52," Cyrus Bina, et al., eds, *Beyond Survival: Wage Labor in the Late Twentieth Century*, M. E. Sharpe, 1996, p.146.

18) T. Gilpin, op.cit., p.47.

19) Ibid., p.48.

我々は、団体交渉契約を、安心して任せられる組合代表を通して労働者の賃金、労働時間、労働条件を守るための制度とみなす。契約は「会社の安定」という虚偽の問題を隠すための制度ではない²⁰⁾。

一方、UAWの山猫ストに対する態度はFEと異なっていた。山猫ストの実施に対する組合の財政的責任（financial liability）の問題を提起したタフト・ハートレー法制定後の1947年に、UAWは自身が代表を務めた5つの工場をカバーする協約をハーヴェスター社と交渉した。もしローカル組合が従業員に仕事に戻るよう、そして生産を妨害していた活動を終結するよう指示する通知を公表しているにもかかわらず山猫ストが発生したとしても、同社はUAWを告訴しないとこの協約は記していた。もし作業停止がすぐに終わらなかったなら、組合幹部はそれを終わらせるのに必要な手段をとるよう要求されたのである²¹⁾。FEがこうした協約に署名しなかったことはいうまでもない。さらに、UAWのローカル6とローカル57の1948年契約には次のような規定があった。それは、FEとの契約にはないものであった。

とにかく、この契約に違反して生産の妨害が起こる場合、UAWは、そのような生産妨害を迅速に終了させるために誠意をもって、そして遅滞なく取り組むであろうし、関係する従業員が仕事に戻り、通常の生産に即座に復帰すると主張することに同意する。その目的のために必要なら、ローカルと国際組合はどんな差別撤廃措置でも即座に採用するであろう²²⁾。

FEの指導層は、団体交渉契約は労働者を守るために使い、守れそうもなければ廃棄するというように活用されるべきだ、と信じていた。彼らは、団体交渉契約を単に労働者と資本家との間の階級闘争の一時的な停戦だとみなし、両当事者間の終戦ではないとみていたのである。こうしたFEに対し、ハーヴェスター社はUAWの「制度化された団体交渉」、つまり作業現場での好戦性の統御——統御しなければ団体交渉自体の目的が達成できない——を支持したのである。こうしたイデオロギーの相違は、ハーヴェスター社との団体交渉協約におけるFEとUAWローカル6の異なった契約条項で明白であった。1947年から1952年まで、UAWローカル6は仲裁を頂点とする5段階の苦情処理手続きを有していた。同ローカルは未解決の苦情に対し合法的にストライキを行うことができなかった。しかしながら、1940年代後半と1950年代初期におけるFEの苦情処理手続きは、それが完璧に利用された後であれば、未解決の苦情に関して公認ストライキを許可していた²³⁾。

FEとUAWの苦情を処理する際の戦略の違いは、FEローカル236（ルイスヴィル工場）の元指導者ジェームズ・ライト（James Wright）によって次のように対比されている。

20) V. G. Devinatz, op.cit., p.151.

21) 22) Ibid., p.152.

23) Ibid., p.151.

[FEにおける] 私たちの戦略は、経営側に打撃を与え、労働者のいい分を伝え、労働者のために公正な仕事を得、労働者に支払われるべき賃金を得、そして前進することでした。けれども、UAWには1つの部門があって、そこには苦情を処理する人物がいましたし、事務職に就いている人物もいました。それで、我々がUAWに加入した時にこう聞きました。「一体全体君たち全員はなぜこの組合に入ったの。これは事務員の組合なの、それとも一体何」と。……我々が[FEで]得たのは簡単で古めかしい茶色の契約と苦情の書き方で、我々は何をすればいいのか知っていた。けれどもUAWでは、次のように語ってくれる人物のいる部門があった。そうですね、それはこの格付けに分類されます、このスキルはこの格付けです、すべてこうしたことが仕事です、と²⁴⁾。

こうした相違が、後にみる作業停止数の違いにはっきりと示されるのである。

FEの対決的な戦術は、単にハーヴェスター社への反発から生まれたものではなかった。そこには、FE指導層の政治哲学も色濃く影響していた。彼らの多くは、公然と表明したわけではなかったが、アメリカ共産党員であった²⁵⁾。そうした共産党との関係、そして労働政治家的な手腕に断固反対する態度により、FEは当時の労働運動の主流から距離を置くことになる。1949年、FEはUAWとの合同を拒否したことでCIOから除名された。同じく左翼的な活動家が主導していた合同電機・ラジオ・機械労働組合 (United Electrical, Radio, Machine Workers, UE) も共産党に支配されているという理由で他の9組合とともにCIOを除名される。FEはこのUEと合同し、UE-FEとなる²⁶⁾。その直後から、FEのいう労働政治家で、改革推進派の反共産主義者ウォルター・ルーサー (Walter Reuther) が率いるUAWからの組合員引き抜き攻勢 (raids, 組織侵入) が一段と激しさを増す。その背後には、ハーヴェスター社のある経営首脳が「UE-FEとわが社の関係と比較して、UAWとの交渉は労使協調 (harmonious) とでも呼ぶことができる」²⁷⁾ と語ることで、UAWに肩入れしていたことがあった。

1920年代に労使協議会制度を通して協調的な労使関係を構築したハーヴェスター社は、従業員代表制が全国労働関係法 (National Labor Relations Act) のもとで違憲とされた後、工場協議会の延長線上に独立組合を結成し、それとの間で協調的な労使関係を構築しようと画策する²⁸⁾。そうした試みがNLRBの代表選挙で挫折したと知れば、CIO系組合よりもAFL系組合を志向し、独立組合をAFL系組合に改組するといった行動をとった。そして、CIO系組合との契

24) Ibid., p.155.

25) 「インターナショナル・ハーヴェスター社とFE」『関西大学商学論集』第52巻第1・2号合併号 (2007年6月) を参照のこと。

26) Gary M. Fink, ed., *Labor Unions*, Greenwood Press, 1977, p.91.

27) T. Gilpin, op.cit., p.48.

28) 伊藤健市「ハーヴェスターにおける『独立』組合結成前史」『関西大学商学論集』第46巻第1・2号合併号 (2001年6月) と同「ハーヴェスターにおける『独立』組合の結成」『関西大学商学論集』第46巻第4号 (2001年10月) を参照のこと。

約交渉が必至だと判断した同社は、FEよりもUAWを交渉相手に協調的な労使関係の再構築へと向かったのである。その際、同社の動きを背後から支えたのがFEとUAWとの抗争関係であった。

2 FEとUAWの抗争

ロバート・オザーン教授（Robert Ozanne）によると、FEとUAWとの抗争は1939年2月には始まっていた²⁹⁾。その時点で、シカゴ・中西部地区のUAW地区組合長と鉄鋼労働者組織委員会（Steel Workers Organizing Committee, SWOC）の委員長フィリップ・マーレー（Philip Murray）は、FEがミルウォーキー地区の代表として過激な左翼として有名であったエミール・コステロ（Emil Costello）を選出したことに抗議していた。この抗議は、FEとUAWの対立が管轄権を巡るそれではなく、イデオロギーを巡る根深いもの、つまり組合対共産党との抗争であったことを示唆している。FEとUAWとの対立が明確なものとなるのは、1940年にUAW委員長R・J・トマス（Thomas）がFEとUAWの合同を力説し、CIOは合同を受け入れるようFEに圧力をかけた時点以降のことである。だが、UAWが合同の際の条件としたロバート・トラヴィス（Robert Travis）とデウィット・ギルピン（DeWitt Gilpin）の除名をFEが受け入れなかったことから合同は実現しなかった³⁰⁾。

対立が敵対へと進んだのは、1941年のUAW大会でUAWの名称が「農機具労働者（agricultural implement workers）」を含めるものに変更されたことが発端であった。しかし、1945年まで、FEとUAWのライバル関係はトラック製造工場の管轄権を分離することで処理されてきた³¹⁾。ところが、第2次世界大戦後、FEとUAWの管轄権を巡る対立は両組合が同じ工場を組織化しようとしたことから一気に深まった。1945年初頭、CIOは再度合同を勧告したが、組合員の支持のもとFEの指導部はそれを拒否した。組合が企業の不可欠な構成要素の1つとして受け入れられるとするウォルター・ルーサーやその一派と、共産党の指導下において、組合の役割は作業現場とそこを離れた労働者を守り、資本家の特権に日々挑戦するとみていたFEが相容れるわけはなかった。UAWはこの頃からFEの組合員引き抜き攻勢をかけ始めた。大戦後、両組合間のイデオロギーの相違が明確な敵対へと発展した。FEは、共産党との関係を維持し、その組合新聞でソビエトの外交政策を支持し、そして他の左翼系組合と同様1948年のヘンリー・ウォレス（Henry Wallace）の大統領選立候補を支援することで、その急進的なイメージを強く印象づけた。それと対照的に、ルーサーがUAWの支配権を掌中にした時、UAWはアメリカ自由主義の賛同者となった。1947年には、FEがその立場を逆転させ、UAW内の反ルーサ

29) R. Ozanne, *op.cit.*, p.216. 前掲邦訳書, 301ページ。

30) *Ibid.*, p.217. 同上邦訳書, 301ページ。B. Marsh, *op.cit.*, p.83.

31) V. G. Devinat, *op.cit.*, p.149.

一派——UAW内で共産党を支持するトマス・アデス派 (Thomas-Addes forces) ——の勢力拡大を狙ってUAWに加入することを提案した。ルーサーは僅差で委員長に選出され、FEとの合意をUAWの組合員投票で否決した。1948年にはルーサーが圧倒的な勝利を収め、合意に失敗したFEは既述のようにCIOから除名されるという憂き目をみるのである³²⁾。

FEとUAWの決裂は、農機具業界全体でFEとUAWのそれぞれのローカルが互いに小競り合いを始める契機となった。最大の勢力基盤であるハーヴェスター社で十分に地歩を固めていたFEは、シカゴのマコーミック工場、ウェスト・プルマン工場、トラクター工場、シカゴ以外のイリノイ州ではファーモール工場、イースト・モリーン工場、ロックフォールズ工場、そしてインディアナ州ではリッチモンド工場におけるUAWの組合員引き抜き攻勢をそれぞれ退けていた。FEはまた、同社の新規工場であるルイスヴィル工場を組織化し、1947年には合同鉱山労働組合 (United Mine Workers) からイリノイ州のキャントン工場を苦心の末、勝ち取っている。その間、UAWはハーヴェスター社が戦後期の拡大のなかで建造した工場のほとんどすべてで勝利を収めていた。1946年11月、UAWローカル6は同社メルローズパーク建設機械工場でのNLRB選挙でFEローカル103に勝ち、またインディアナ州エヴァンスヴィルの冷却工場でも勝利した。2年後、UAWは新規工場であるメンフィス工場での選挙で勝利し、初めて同社の農機具労働者を組織した。マコーミック工場の事務部門と工具部屋の労働者、そしてルイスヴィルの鑄造工場労働者を組織することにより、UAWは、FEがすでに支配権を有していた工場で限定的とはいえ前進していたのである³³⁾。

両組合の覇権争いで漁夫の利を得たのはハーヴェスター社であった。FEとUAWが統一戦線を組めなかったことは、当然のことながら両組合の交渉力を弱める結果をもたらした。先に取り上げた1946年にFEが主導したストライキ中もUWA系の工場が操業を続けていたように、一方の組合がストライキを行っている間、もう一方の組合はストライキを拒否し、その組合員は働き続けた。いずれの組合も全社規模での作業停止に追い込むことはできなかったことから、ハーヴェスター社は少なくともほぼ半分の工場で操業を続けられると期待できたのである。だがそれは、半分近い工場が作業停止に追い込まれていたことを意味している。さらに、覇権を掌中にできなかったFEとUAWにとり、一般組合員の支持を勝ち取る方法として好戦性を重視することになったのは、同社にとって大問題であった。

ハーヴェスター社では、第2次世界大戦後の10年間に1,200回以上の作業停止が発生していた³⁴⁾。その大半の原因が出来高給制度にあったことはいままでもない³⁵⁾。だが、操業停止や協

32) R. Ozanne, *op.cit.*, p.217. 前掲邦訳書, 302ページ。

33) B. Marsh, *op.cit.*, pp.83-84. 1952年の数字では、ハーヴェスター社の組合員でFEは2万8,000人を擁していたが、それはUAWよりも4,000人多いだけであった (“Wage Chronology, No. 28,” *Monthly Labor Review*, August 1952, p.167.)。

34) B. Marsh, *op.cit.*, pp.81-82.

35) 伊藤健市「出来高給制度とFE」『関西大学商学論集』第52巻第3号合併号 (2007年8月) を参照のこと。

約交渉時のストライキ（1946～48年交渉，1950・52・58年交渉）は，同社の労使関係に根源的な原因があった。ハーヴェスター社側は，ストライキの原因を急進論者とその組合にあるとみなしていたし，組合側は組合承認に対する同社の怠慢にあるとみなしていた。前者は，FEのみに責任を帰すべき問題であろうか。

すでに指摘したように，「好戦性」は共産党系のFEと非共産党系のUAW双方にとってハーヴェスター社で覇権を握るための必要条件であった。FEは，UAWよりもはるかに多くの作業停止を行っていた。1945年1月1日から1954年10月1日まででみるならば，FEの1,035件に対し，UAWは197件であった³⁶⁾。FEはローカル236の好戦性を誇らしげに次のように語っている。

〔ルイスヴィル〕工場では，労働者は賃金をカットする会社の執拗な試みに対して闘いを挑みそれを撃退した。賃下げがあった時はいつでも，労働者は作業を止めた。1948～1949年の間に同工場では180回以上の作業停止があった。賃金カットの代わりに，同工場の平均賃金は着実に上がった³⁷⁾。

FEローカル236は，1948年6月から1949年3月まで高水準で作業停止を実行したほかに，2,225件の苦情を提出していた。また，1950年1月から10月までに107回の作業停止を指導し，そして2,065件の苦情を提出した³⁸⁾。しかし，スプリングフィールド工場のようなUAW系工場でも1946～47年にはFE系工場よりも多くの作業停止を行っていた³⁹⁾。また，1952年にUAW系工場であるメルローズ・パーク工場において，時間研究に対する苦情が原因で発生したストライキは，FE系工場で最も好戦的であるといわれていたイースト・モリーン工場での作業停止による労働時間損失記録を上回っていた⁴⁰⁾。以上の点に関し，オザン教授は次のように纏めておられる。

両組合（FEとUAW—註，伊藤）によってコントロールされていたハーヴェスター社の諸工場における1945年10月から1951年10月までの作業停止での損失賃金を合計し，次にそれを同社に雇用されている両組合の平均労働者数で割れば，作業停止による組合員1人当たりの損失賃金とでも名付けうるものが得られる。この計算による6年間の組合員1人当たりの賃金損失は，UAW系工場で1,189ドル，FE系工場で893ドルであった。もし，1952年のFEによる大ストライキを含めるために，もう1年延長すればUAW系の1,356ドルに対してFE系は1,454ドルの損失でUAWを追い抜くのである⁴¹⁾。

FEは作業停止の数では上回っていたが，その期間となればUAWの方が上であった。FEが

36) Benjamin M. Selekman, Sylvia K. Selekman and Stephen H. Fuller, *Problems in Labor Relations*, 2nd ed., McGraw-Hill, 1958, p.623.

37) 38) S. Rosswurm and T. Gilpin, *op.cit.*, p.498.

39) 40) 41) R. Ozanne, *op.cit.*, p.214. 前掲邦訳書，298ページ。

一方的に好戦的で、UAWはそうではなかったとは断定できない。このように、ハーヴェスター社におけるFEとUAWの活動をみる限り、組合指導者のもつ政治的急進主義のみが好戦性に結び付かないことは明白である。それは、保守的な組合指導者が協調的な労使関係と同義でないのと同じである。つまり、FEとUAWの指導層が好戦的であったのは彼らの政治哲学というよりも、ひとえにハーヴェスター社の労使関係政策に起因するものであるとみなすべきである。もちろん、同社が自己の責任を認めるわけではない。ハーヴェスター社は、「大量の苦情、度重なる作業停止、協約満了時の頻繁なストライキといったことの大部分が、FEのいわゆる共産党指導体制の結果であったという立場」⁴²⁾を堅持し、FEを攻撃目標に据えたのである。

こうした状況下、ハーヴェスター社は表立った動きではないが、結果からみればUAWに肩入れするとみられても仕方のない特徴的な行動をとるようになる。

1950年8月22日、ジェラルド・フィールドは同社との契約交渉でFE組合員に対し、1時間につき7セント、平均1時間1.64ドルの賃金を勝ち取った。その2日後、UAWは同社との契約交渉でFEと同条件の受け入れを拒否し、ストライキに入った。翌日、同社はFEとの賃金契約を一方的に解消した。その理由は、FEによる山猫ストの増大にあった⁴³⁾。これに憤慨したフィールドは、『ニューヨーク・タイムズ (*New York Times*)』紙に対し、「ハーヴェスター社は、現代史で労働者を裏切る最も恥知らずな行為に対して償わなくてはならない」⁴⁴⁾と語り、FE組合員にストライキを命じる一方、同社にはUAWが求めているのと同じ改善点を提供するように要求した。その内容は、1時間当たり15セントの賃上げと生計費調整であった。9月中旬、FE組合員は平均賃金を1時間当たり10セント引き上げ、生計費調整を提供するとの条件で和解し、仕事に戻った。一方、UAWは11月4日までストライキを続行し、FE組合員がすでに手にしていたもののほかに、休暇の自由な取得、休日手当、そして出来高給制度のもとで働く従業員に対するはるかに高額な手当を獲得した⁴⁵⁾。この内容は、それまでと違い、UAWが初めてFEの契約よりもいい内容を獲得したことを示している。しかも、FEが同意したのが2年協約だったのに対し、UAWは5年協約を締結していた。これが1952年ストライキの遠因になる。その背後には、先に指摘したUAWとの関係を協調的關係とみるハーヴェスター社経営陣の考えに加えて、「UAWが享受していたよりも多くを与えることでこれまで以上にUE-FEを強くしないことが緊急の課題」⁴⁶⁾となっていたことがあった。

42) *Ibid.*, p.213. 同上邦訳書, 297ページ。

43) B. Marsh, *op.cit.*, p.84.

44) "Harvester Strike," *New York Times*, August 28, 1950.

45) B. Marsh, *op.cit.*, pp.84-85.

46) R. Ozanne, *op.cit.*, p.219. 前掲邦訳書, 304ページ。

3 1952年ストライキとFEの消滅

1952年、ハーヴェスター社はFE（UE-FEというべきか）との全面的な闘いを決意した。しかもそこでは旧来みられなかった新たな動向、つまり政府が同社を背後から支えるといった事態の変化があった。もちろん、ハーヴェスター社経営陣のFEに対する嫌悪感、さらにはCIOから除名されたことでFEの財政的基盤が弱体化したことも大きな要因であったことはいうまでもない。

FEの2年協約が1952年に更新時期を迎えた時、ジェラルド・フィールドはいかなる犠牲を払おうともUAWよりいい内容での契約締結を目論んだ。しかし、ハーヴェスター社とFEとの契約交渉は物別れに終わり、フィールドは同年8月ストライキを決行した。それは、結果からみれば最悪の選択であった。だが、フィールドにとってはやむを得ない選択でもあった。それというのも、このストライキの2か月前、UAWはマコーミック工場のFEローカル108の組合員に対し、「モスクワの力」の支配から解放するとの誓いのもと、組合員引き抜き攻勢をかけていたのである。トラクター工場のFEローカル101と比べ、穏健かつ保守的とみられていたFEローカル108は、ある意味FEの弱点でもあった。だが、マコーミック工場がハーヴェスター社の牙城であったことは紛れもない事実で、FEはその前身のFEWOCの時代に万難を排して同工場で排他的代表権を獲得したのであった⁴⁷⁾。幸い、1952年のUAWの攻勢に対しても、マコーミック工場の「保守的な」労働者はFEに留まることを票決した。一方、こうしたFEの立場を危うくする事態も進行していた。

冷戦が引き起こした朝鮮戦争下、アメリカの政治家は国内外で共産主義の正体を暴き、排除する試みを続けていた。その主役は、いうまでもなく下院非米活動委員会（House Un-American Activities Committee, HUAAC）であった。HUAACの活動は、「アカ」の身元を明らかにすると主張して以降、マスコミに大きく取り上げられるようになった⁴⁸⁾。だが、こう

47) 伊藤健市「マコーミック工場における組合運動の勝利」を参照のこと。

48) マスコミはその情報を広く一般大衆に公表するが、公表されない情報もあった。いうまでもなく、連邦捜査局（Federal Bureau of Investigation, FBI）の収集した情報である。1955年末時点で、UEに関するFBI本部のメインファイルは2,859番までの番号が振られていた。これをFEとの関係で見れば、FEに関してはわずか296のファイルがあるだけであつた。シカゴの地区事務所にはUEに関して42のセクションがあつた。ニューヨーク地区事務所には230以上のセクションとピッツバーグ地区事務所には58以上のセクションがあつた（S. Rosswurm and T. Gilpin, op.cit., p.488.）。ただし、FEに関しては中核となる保管場所はなかつたようである。組合のみならず、FBIには個人のファイルもある。例えば、ウォルター・ルーサーのファイルは、FBI本部にメインファイルが12、ボストン、デトロイト、ミルウォーキーに2つのファイル、ニューヨーク、ニューアーク、リッチモンド、サンフランシスコには1つのファイルがあつた（S. Rosswurm and T. Gilpin, op.cit., p.491.）。

した風潮が蔓延するなかでも、FEはその好戦的な活動を止めることはなかった。1952年2月、マコーミック工場の従業員は、通常要求されていない作業遂行を拒否したことで停職処分を受けていた鑄造工を支持してストライキを行い、同工場を3日間閉鎖した⁴⁹⁾。彼らが仕事に戻ったのは、ハーヴェスター社が停職処分を無効にした時点であった。さらに、同年8月初旬にもFEの好戦性が発揮される出来事が生じていた。ハーヴェスター社がトワイン製造所の設備をニューオーリンズに移すと発表したのである。その大部分がアフリカ系アメリカ人で、その多くが女性であった同製造所の従業員860人を代表していたFEローカル141は、次のような直接行動によって同社の決定を妨害した。

ハーヴェスター社が工場の壁に穴を開け、機械を動かし始めた時、トワイン製造所の労働者はその仕事を止め、その穴を煉瓦でふさいだ。ハーヴェスター社の経営陣が機械の解体をあくまでも頑固に押し進めた時、従業員は同製造所内で坐り込みストライキを始めた⁵⁰⁾。

坐り込みは警官の介入によって3日間で終わったが、トワイン製造所の従業員とトラクター工場・マコーミック工場から応援に駆けつけたFE組合員のピケ・ラインが工場設備の移動を阻止し、17人のピケ隊員が逮捕されたもののハーヴェスター社は当面工場閉鎖を断念したのである。

8月末での協約満了が近づいた時、FEは1時間につき15セントの賃上げ、給与体系の簡素化、スピード・アップに対するこれまで以上の保護を含む要求を提出した。FEとの契約が「最悪の契約」⁵¹⁾と認識していたハーヴェスター社は、全面的な契約更新を望んでいた。とりわけ、出来高給制度のオーバーホールを目的に置いていた。ハーヴェスター社は、FEとの協約下では4～6時間働くだけで1日分の給与を得ている者がいると考えていた。その原因は、「正確な生産基準」の測定がFEによって妨害されていたことにあった。この点を、同社の労使関係担当役員は次のように表明している。

1日の頑張りに1日分の給料を提供することに関して現実主義を実現しようとした当社の試みは、苦情処理手続きにおける山猫スト、スローダウン、嫌がらせ戦術などを使うFEによって抵抗された⁵²⁾。

ハーヴェスター社は、FEの力量を削ぐか、完全に阻止できる契約に変更しようとした。同社は、FEのショップ・スチュワードが苦情を調査している間も給与を支払うことを認めていた条項を排除する決定を行い、山猫ストを禁止する契約内容を強化することでFEの弱体化を図った

49) 50) T. Gilpin, op.cit., p.49.

51) 52) Ibid., p.50.

のである。

FEは1952年8月21日にストライキに突入した。このストライキは約3万人の従業員を巻き込んだ。その内の半数は、シカゴにあるマコーミック工場、トラクター工場、トワイン製造所、ウェスト・プルマン工場の従業員であった。同社は、ストライキの終結に向けて直接従業員に訴えることを決意した。まず、同社従業員は急進的な組合指導者の掌中にあるとして、ストライキ期間中も工場を操業し、ストライキを断念するよう説得するキャンペーンに乗り出した。その結果、9月初旬までに、およそ800人の従業員が仕事に戻った。

こうした取り組みの一方で、ハーヴェスター社はその標的をFE指導層に絞った戦術も試みた。『シカゴ・トリビューン』紙の広告——その背景にハンマーと鎌が描かれていた——では、「最も影響力のあるUE-FEの指導層は共産党員あるいは共産党のシンパである」と指摘していた⁵³⁾。同紙のみならず、シカゴの各マスコミはFE指導層の信頼性を傷つける記事で同社をサポートした。それに対してFEは、同社の提案は賃下げであって、それがストライキの原因であったという広告を出すとともに、「熱い戦争や冷戦のヒステリーと反労働者的な法律によってハーヴェスター社のかつてなく巨大化した利潤のかつてない分け前を求めるのを妨げないことがわが組合の責務である」と反論した⁵⁴⁾。それに加え、FEは次のように指摘することで、ハーヴェスター社が今回のストライキを契機に同組合の徹底壊滅を意図していることを白日のもとに晒したのである。

UE-FE 3万の組合員に対する今回の攻撃の背景は、1886年に労働者が1日8時間労働制を求めて闘ったことにある。当時の労働者の闘争は、彼らを攻撃したハーヴェスター社が支配する警察によって流血の騒動となった、この世界的な会社が支持する無益な取り組みで多くの人々が殺されたが、適正な労働条件へと向かう労働者の前進はいかなる方法であれ可能である……。今日、ハーヴェスター社は、同社が好むもう1つの標的であるアメリカの労働者に向けられた攻撃でもう一度残虐行為とその黙認に頼ることで、あらゆる邪悪な手段に嵌り込んでしまっている……。現下のハーヴェスター・ストライキは歴史との闘いであり、世界中のあらゆるところにいるすべての労働者の賃金と福祉に影響を及ぼす闘いである⁵⁵⁾。

こうしたFEの必死の取り組みを水泡に帰す事態が生じていた。ストライキが始まって2週間が経過した時、HUAACが組合運動における共産主義の影響を調査するためにシカゴを訪れ、公聴会を開催した。参考人にはマコーミック工場で働いた経験をもつ経営首脳が1人が含まれ、彼はFEの指導層は共産主義者であると証言した⁵⁶⁾。一方、ジェラルド・フィールドとFE指導層の内の何人かが召喚され、共産党員であったかどうかの証言を求められ、フィールドらは憲

53) 54) 55) 56) Ibid., p.51.

法修正第5条による保護を求めて証言を断った。だが、『シカゴ・トリビューン』紙の見出しは、「彼らは共産党員であるかどうか明らかにするのを拒否」⁵⁷⁾と記載していた。さらには、上院小委員会に召喚されたUEの幹部役員の1人ジェームズ・マートレス (James Matles) は、他の幹部が共産党支配を否定したにもかかわらず、UE組合員の内の何人かは共産党員であると証言していたのである⁵⁸⁾。以上の反共産主義気運——その多くはHUAACなどの活動によって煽られたものであった——のもと、FE組合員のなかにその指導層を疑う者も出始めた。ファーモール工場の元FE活動家であったセシル・クウェイルス (Cecil Quails) は、バーバラ・マーシュ (Barbara Marsh) に次のように語っている。

ロシア人は戦争中は我々の同盟者であり、当時共産党員であることは問題なかった。しかし、時を経るにつれ、私はUEの幹部役員のすべてが共産党員であるとみなすようになった。それが私を不快にした。というのも、私が依然実直なアメリカ人で、ロシアと同盟することは危険だと考え始めたからである⁵⁹⁾。

こうした絶好の機会を社長ジョン・マカフレイは見逃さなかった。彼は、ストライキ参加者の自宅にフォアマンを赴かせ、仕事に戻るよう説得させていた。従業員とその配偶者は会社から数多くの手紙を受け取っていたし、ストライキ参加者に仕事に戻るよう促す広告を新聞に掲載していた。FEのピケ・ラインを越えてくる者は、誰であれ仕事を提供し、工場に送り届けるための自動車を手配したり、バスをチャーターしていた⁶⁰⁾。マカフレイは、経営陣で構成される巡回委員会 (traveling committee) とともにFEの拠点工場を訪問した。イリノイ州のシカゴ、ロック・アイランド、イースト・モリーン、ロック・フォールズ、インディアナ州のリッチモンド、そしてケンタッキー州のルイスヴィルである。そして、暴力を予測していた工場長が、本社経営陣は自分たちを支援してくれるのかどうかを知りたがった時に、マカフレイは次のように答えた。

仲間の皆さん、……シカゴの本社経営陣があなた方を支えなかったあまりにも長い時間がありました。でも今回は違います。何週間あるいは何か月続くかわかりませんが、私が関係する限り、今回は本気で支え続けます⁶¹⁾。

57) Ibid., p.51.

58) B. Marsh, *op.cit.*, p.85.

59) *Ibid.*, pp.85-86.

60) T. Gilpin, *op.cit.*, p.51.

61) B. Marsh, *op.cit.*, p.86.

ストライキが6週間を経過した10月3日、マコーミック工場のアフリカ系アメリカ人従業員ウィリアム・フォスター（William Foster）が仕事に向かうため自宅を出たところで頭を殴られ、殺された。彼はストライキ直後に仕事に戻った従業員の1人であった。シカゴのマスコミは、多くのFE幹部が殺人に関して尋問されたと報道し、ハーヴェスター社はフォスター事件に関する情報に1万ドルの報奨金を出すと発表した。10月10日、マコーミック工場内の鋳物工場のストライキ参加者でFEローカル108の会計担当書記であったハロルド・ウォード（Harold Ward）が、フォスター殺害の罪に問われた。FEは、アフリカ系アメリカ人リーダーの1人であったウォードが「ハイマーケット事件を彷彿させる新たなでっち上げ（a new Haymarket frame-up）」の犠牲者となったと主張し、彼を弁護するために全国委員会を組織した。FEのアフリカ系アメリカ人メンバーが発行した『ストライキ・コール（Strike Call）』は、ハーヴェスター社が「すべての好戦的な黒人を怖がらせるためにハロルド・ウォードのようなアフリカ系アメリカ人リーダーを合法的にリンチにかける」試みの背後にいたと断言した⁶²⁾。その間、シカゴの各紙は裁判前ではあったがウォードとFEは有罪であるとしていた。『サン・タイムズ（Sun-Times）』紙のある論説は次のように宣言していた。

アメリカの労働者を代表するだけの価値のある理性的行動ができる組合であれば、労働争議に勝つために暴力や最終的には殺人といったことを取って行く必要はない。ハーヴェスター社の労働者がUE-FEと縁を切る時が来た……⁶³⁾。

12月にウォードは無罪と判決されたが、その時点ですでにストライキは終わっていた。

1952年10月16日、争議指し止め命令が認められ、それ以降ストライキは収束に向かう。FEの87日間に及ぶストライキは、11月15日にジェラルド・フィールドがシカゴの कांग्रेस・ホテル（Congress Hotel）でハーヴェスター社のいうUE-FE指導部の「完全なる敗北」を象徴する契約書に署名した時点で終わった。その時の打ち拉がれたフィールドの姿を、アル・ヴェリは次のように表現していた。

私はこれまで、敗北した表情をみせる彼を見たことはありませんでした。彼は会社側の代表者のところまで歩き、ハーヴェスター社にストライキを終わらせたことを告げ、契約書に署名しました。もしその日の彼の署名を見たなら、それが常と違ってよく目立つ特徴がなかったことがわかるでしょう。むしろそれは殴り書きでした⁶⁴⁾。

62) 63) T. Gilpin, *op.cit.*, p.55.

64) B. Marsh, *op.cit.*, p.87.

その折の合意事項は、賃金と出来高払い仕事の見直し、そしてより厳格なストライキ禁止条項など、ハーヴェスター社が当初より求めていたものをすべて含んでいた。FEはショップ・スチュワードの有給休憩時間も失った。さらに、ストライキ中に解雇されたFEの組合員が復帰することはなかった。このことは、いくつかの工場ではFEローカルの指導體制を弱体化せしめた。例えば、FEローカルのなかでもその好戦性で知られていたローカル236（ルイスヴィル工場）では、1952年ストライキ後、組合員がそれまでの3,500人から2,500～2,800人にまで減少し、ローカル役員の候補者を見つけるのに苦労していた⁶⁵⁾。また、ハーヴェスター社は従業員に組合費の天引きを辞退するか、あるいは完全にFEを脱退するかのどちらかを選択する「脱退期間 (escape periods)」を設けることを強く迫っていた⁶⁶⁾。それにもかかわらず、ストライキ後のFEの声明は、「UE-FEは労働者の敵が一塊となって一緒に仕掛けた猛攻撃から生き残り、UE-FEを破壊せんとする彼らのすべての取り組みを撃退した⁶⁷⁾」と記し、次のように高らかに宣言していた。

これまでよりも高い生活水準を求めて闘い続けることを決意して、我々はハーヴェスター社の工場に戻る。それは、戦闘的なユニオンズムを通してのみ達成可能なことである⁶⁸⁾。

事実、ストライキが集結する1週間前にマコーミック工場に仕事に戻っていた従業員は約35%、トラクター工場では20%、ハーヴェスター社の工場全体ではわずかに8,000人の従業員が働いていただけであった⁶⁹⁾。UE-FE指導部の「完全なる敗北」というハーヴェスター社の評価は時期尚早であった。トラクター工場のFE役員ハンク・グラバー (Hank Graber) によれば、従業員は次のような態度で仕事に戻ったそうである。

仕事に戻らなければならなかった日の前夜に、我々は会合を開いた。それじゃ、我々が仕事に戻る時、「団結よ永遠なれ」と歌って戻ろうではないか。そして、我々は「FEローカル101の委員長」ピート・ネピューティ (Pete Neputy) を先頭に押し立てようではないか。仕事に戻る前に、笛が吹かれるまで待っている少なくとも1,000人の組合員資格者が工場の外にいる。笛が吹かれた時、ピート・ネピューティが先頭に立ち、我々は全員彼の後ろを行進した。それから我々は、「団結よ永遠なれ、組合は我々を強くする」と歌った。我々はそれを本当に大声で歌った。本当に大声で歌っている1,000人の労働者は、嘘ではなく、経営陣を動揺させた。これらの男たちはたった今ストライキで敗北したが、ものすごい勝利を勝ち取ったかのように戻って来た⁷⁰⁾。

65) S. Rosswurm and T. Gilpin, op.cit., pp.499-500. その後も組合員は減り続け、1,800人にまでなったようである (Ibid., p.500.)。

66) 67) 68) T. Gilpin, op.cit., p.57.

69) Ibid., p.55.

70) Ibid., p.58.

こうした動きを知っていたかどうかは不明だが、落胆したジェラルド・フィールドがFEに再度戻ることはなかった。

FE組合員の意気込みは別にして、1952年ストライキの和解はUE-FEに大打撃を与えた。しかもその後2年間の間にハーヴェスター社が押しつけた契約条件が結局はFEを壊滅状態に至らしめるのである。その2つの条件とは、1つにはUE-FE組合員の組合費天引きには個々の組合員が天引き依頼書に署名しなければならないというものであり、もう1つはショップ・スチュワードは苦情処理活動を行っていたとしてもハーヴェスター社に賃金を負担させてその職務から自由に離れられなくするというものであった⁷¹⁾。結局、組合費天引き依頼書に署名した従業員は50%であり、これはFEの財政基盤を蝕むことになった。一方、苦情処理に要した時間の賃金を失ったことで、スチュワードとFEローカル役員との間が疎遠になり、彼らスチュワードはUAWの協約下で享受できる特典に思いを馳せることになる。

1953年3月、トラクター工場経営陣が新たな懲戒条項を実施するためにピート・ネビューティを含む270人の従業員を停職処分にしたことに対し、残りの従業員が即座にストライキに入り4日間とはいえ工場を閉鎖するなど⁷²⁾、まだその勢力を誇示できたFEであったが、上記のようなハーヴェスター社の徹底抗戦を前にして、その弱体化を認めざるを得なくなった。それは、FEとUAWとの抗争に終止符を打つものであった。1954年、FEのローカルはUAWに加入することを票決した。それはFEが事実上消滅することを意味した。この動きは、同年5月26日、まず最初にイースト・モリーン工場から始まり、次いでファーモール工場、その後シカゴのマコーミック工場、トラクター工場、ウェスト・プルマン工場、次いですべてのUE-FE系の工場、つまりキャントン工場、ロック・フォールズ工場、リッチモンド工場、ルイスヴィル工場へと拡大していくのである。その背後には、FEがマッカーシズムのもとでの1954年8月の共産主義者統制法（Communist Control Act）への対処を余儀なくされていたことがあった。同法は検事総長（attorney general）に、組合が共産主義者に支配されていることを宣言するために、諜報破壊工作活動統制委員会（Subversive Activities Control Board）を活用する権限を与えた。それでFEは全国労働関係法のもとでのいかなる保護も奪われてしまったのである。さらに、もし共産主義者によって支配される組合員のわずか20%が代表選挙を要求しても、当該組合は新しい非共産主義者の指導層のもとで再編すればその契約を維持でき、そして全国労働関係法とNLRBを活用できたのである⁷³⁾。1955年3月中旬、FE組合員はUEとの傘下関係の解消に賛成投票し、FE全体でUAWに加入することを票決し⁷⁴⁾、消滅した。

71) R. Ozanne, *op.cit.*, p.219. 前掲邦訳書, 305ページ。

72) T. Gilpin, *op.cit.*, p.58.

73) V. G. Devinatz, "Farm Equipment and Metal Workers Union," p.439.

74) R. Ozanne, *op.cit.*, pp.219-220. 前掲邦訳書, 305~306ページ。